

令和3年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

生徒の持てる力や可能性を最大限伸ばす「創造力を育む学校」をめざす。

- 1 地域やグローバルな社会を『たくましく生き抜く力』の基となる「豊かでたくましい人間性」の涵養
- 2 地域やグローバルな社会を『たくましく生き抜く力』の基となる「基礎体力」・「確かな学力」の定着
- 3 将来の生き方をデザインし、自ら学び続けることができる生徒の育成
- 4 自ら学び続ける教師集団の確立

2 中期的目標

1 地域やグローバルな社会を『たくましく生き抜く力』の基となる「豊かでたくましい人間性」の涵養

(1) 安全安心な学校生活。

ア 生徒をより深く理解するために、「高校生活支援カード」「個人面談週間(4月・6月・11月)」等を活用する。

また、「学年会議」等で、生徒情報を共有化し、中退やいじめの防止に努める。

※ 生徒の「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生が多い」(H30:62.7% R1:59/2% R2:58.9%をR5年には70%にする)

※ 保護者の「学校は親身になって相談に応じてくれる」(H30:62.7% R1:59/2% R2:67.8%をR5年には75%にする)

※ 生徒相談室の利用方法を周知する(生徒向け:ポスターの作成や生徒相談だよりの発行。保護者向け:長期休暇中の指導や保護者メールなどによる情報提供)

イ 部活動を通して多くの生徒に成功体験を積ませる。

※ 生徒の「学校は部活動が活発になるよう取り組んでいる」(H30:50.4% R1:41.8% R2:43.4%をR5年には65%にする)

(2) 主体的に多様な人と協働しながら学ぶ態度を養う。

ア 校外での活動で生徒が活躍できる場を提供する。

イ 基本的な生活習慣の確立。

※ 生徒の「普段から遅刻しないよう心掛ける」(H30:79.9% R1:78.0% R2:79.5%をR5年には85%にする)

ウ 生徒が学校行事を自主的に企画・運営することで達成感を実感させる。

エ 地域社会や学校の一員としての自覚と責任感を持ち、愛校心及び他者を思いやる心を養う。

※ コミュニケーション能力については、その向上のために、授業・HR・特別活動、またイングリッシュ・カフェ等の新たな体験的な取り組みなどを活用しながら以下のような段階を踏む工夫をしながら取り組む。

①あいさつ:相手にアクセスする ②自分の意志を伝える ③相手を理解する ④周りの状況が分かり、その中での相手と自分を理解する

⑤社会の規範を理解した上で、社会とコミュニケーションできるようにする。

(3) 学校施設等の諸条件の整備と防災教育。

ア 学校施設等の諸条件の整備。

イ 防災教育や危機管理体制を再構築する。

2 地域やグローバルな社会を『たくましく生き抜く力』の基となる「基礎体力」・「確かな学力」の育成

(1) 「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」生徒のやる気を引き出す。

ア ICT活用と言語活動をキーワードに、「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」で、生徒のやる気を引き出す。

※ 教員の「ICTを使って授業を展開している」(H30:68.9% R1:72.0% R2:85.7%をR5年には90%にする)

イ 少人数展開授業をはじめ、各授業や講習、補習の充実を図り、基礎基本の定着に努める。

※ 生徒の「内容がわかりやすい授業が多い」(H30:63.5% R1:64.1% R2:60.7%をR5年には80%にする)

(2) 生徒に「知能・技能」「思考力・判断力・表現力」の育成。

ア 生徒の多様な学びの要望に応えるカリキュラムや課外プログラムの提供に努める。

イ 生き抜いていく基となる資格取得を進める。

ウ あらゆる科目において、「考える」「まとめる」「発表する」参加体験型のアクティブラーニングを研究する。

※ 生徒の「学習の評価は、テストの点だけでなく、生徒の努力や授業に取り組む姿勢等を含めて行われている」(H30:75.9% R1:72.2% R2:72.6%をR5年には85%にする)

※ 学校運営協議会の提言を参考にし、人材をうまく活用できるよう、組織作りについては、地域人材、地域の教育資源(各種教育機関等)との連携を意識すると共に、「イングリッシュ・カフェ」などの地域連携企画を継続発展させ、学校・家庭・地域との連携・協働・活性化、小・中・大・専門学校・事業所・関係諸機関とのより一層の連携・協力を通じて効果的な教育活動を行い確かな学力の向上に努める。また、コミュニケーション能力の向上に努める。

1) 大学・専門学校等での授業体験や学生の教育ボランティアの導入などで効果的な学習に取り組める環境づくりと高大連携の推進を図る。

2) インターンシップをより一層充実させるなど、職業指導やキャリア教育の推進を図る。

3) 様々なメディアを活用して教育力向上に努め、家庭・地域・小中学校等への積極的な発信に努める。

4) カリキュラム・マネジメント、授業力の向上のための具体的組織づくりに取り組む。

5) あらゆる科目において、生徒の「考える」「まとめる(統合)」「発表(発信)する」力等の生徒の学びの質の向上に取り組む。特に、授業時間の確保や探究、朝学習などの活性化に取り組む。

3 将来の生き方をデザインし、自ら学び続けることができる生徒を育成

(1) キャリア教育プランの実行。

ア 3年間のキャリア教育プランに基づき、1年次から進路意識の高揚を図り、生徒個々が将来の生き方をデザインする。

※ 生徒の「将来の進路や生き方について考える機会がある」(H30:68.1% R1:69.9% R2:63.8%をR5年には80%にする)

イ 1年次より外に出かけ、進路を意識する機会を提供する。

<p>ウ 「学力向上のためのプロジェクトチーム」の取組みを通して、将来を見据えて継続的に頑張ることができる生徒を育てる。</p> <p>エ あらゆる教育活動を活用し、生徒や保護者へのきめ細やかな情報の提供を行う。</p> <p>※ 生徒の「先生は進路についての情報を良く知らせてくれる」(H30:69.0% R1:65.8% R2:62.6%をR5年には80%にする)</p> <p>オ 卒業時の進路未決定者の割合を減らす。(H30:12.0% R1:5.0% R2:5.0%をR5年には0%にする)</p> <p>(2) アセスメントの活用。</p> <p>ア 基礎教養の定着度や「個々の強み」を知るために、アセスメントを活用し、一人ひとりが持てる力を伸ばし、進路実現を図る。</p> <p>※ 生徒の「自分の学力の向上を実感している」(H30:56.1% R1:49.2% R2:47.6%をR5年には70%にする)</p> <p>(3) 入学前から生き方プランを考える機会を提供する。</p> <p>ア 本校で頑張りたいと思う生徒が入学できるように広報活動を行う。</p> <p>イ 「スポーツフェスティバル in イズトリ」の継続実施により、様々な活躍の場があることを示す。</p> <p>4 自ら学び続ける教師集団の確立</p> <p>(1) 授業改善のための学び合い。</p> <p>ア 外部の力を活用した研修を行い、自ら学び続ける教師集団を育む。</p> <p>※ 教員の「私は、学校の教育活動について、教職員で日常的に話し合っている」(R2年の77.6%をR5年には100%とする)</p> <p>イ 外部の研修に参加しやすい職場環境を保持し、研修で得た情報や知識を校内研修で共有し還元する。</p> <p>ウ 授業観察及び相互の意見交換を行うことで自ら授業改善に取り組む。</p> <p>※ 生徒の「他の先生が授業を見学に来ることがある」(H30:59.7% R1:66.7% R2:52.6%をR5年には80%とする)</p> <p>(2) 教員が本校生徒、学校の実情を知る。</p> <p>ア 情報交換の場を設けることで交流を促す。</p> <p>※ 教員の「若手教員と先輩教員の交流を定期的実施している」(H30:42.2% R1:51.0% R2:49.0%をR5年には70%とする)</p> <p>イ ミドルリーダーの自覚を促し、学校の活性化に向けての取組みを立案させる。</p> <p>※ 教員の「学校教育計画・学校経営計画の重点目標に照らして目標を設定し教育活動を行う」(H30:53.3% R1:66.0% R2:79.6%をR5年には85%とする)</p> <p>5 働き方改革に関する取組</p> <p>(1) 業務改善の推進</p> <p>ア 学校行事や会議、打合せ等の見直し、会議や打合せ等の効率化、事務の電子化等の合理化を図る。(R3は職員会議の回数を20回以内に抑える)</p> <p>イ 部活動の負担軽減</p> <p>※ガイドラインの作成、土日の活動はどちらかにするなどのルール作り</p> <p>ウ 勤務時間に関する意識改革と時間外勤務の抑制</p> <p>※ 出退勤時刻の適正管理、時間を客観的把握と必要に応じた指導・助言、会議や打合せ等が勤務時間外に及ばないように留意する。(月80h以上の超勤者0人)</p> <p>エ 学校を支援する人材の確保</p> <p>※ 学校の教育活動を支援するボランティア等の外部人材を積極的に活用する。(教育ボランティアの募集、来てもらっているカウンセラーの活用促進、スクールソーシャルワーカーの導入、福祉協議会、NPO団体などの活用、TNET等の英語専科を担当する教師などの活用、部活動指導員、スクールサポートスタッフなど、多様なスタッフの配置促進)</p>
--

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析[R3年12月実施]	学校運営協議会からの意見

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価	
1 地域やグローバルな社会を『たくましく生き抜く力』の基となる「豊かでたくましい人間性」の涵養	<p>(1) 安全安心な学校生活。</p> <p>(2) 主体的に多様な人と協働しながら学ぶ態度を養う。</p> <p>(3) 学校施設等の諸条件の整備と防災教育</p>	<p>(1) ア 「高校生活支援カード」を「個人面談週間」等を活用しながら保護者との連携を密にし、生徒の理解を深める。 イ 新入生に「部活動体験」を工夫する等、部活動加入率の向上を図る。 ウ 生徒自身が学校を大切に思い、清潔で快適な学校生活を送れるよう努力する。また、安全安心に配慮しながら校外学習や修学旅行なども工夫する。</p> <p>(2) ア 年間を通してボランティア等への積極的な参加を推進する。 イ 生徒への声掛けを励行する。また、教員が登下校時の指導・見守りに当たるなど遅刻防止等の指導方法を検討する。それらのことにより、生徒の規範意識を高めるとともに遅刻者数を減らす。 ウ 学校行事で生徒が前面に立った運営を行う。 エ 「乗車マナーキャンペーン」「地域清掃」「農園活動」等の継続実施で地域とのつながりを密にする。</p> <p>(3) ア 基本的な施設の点検、改修等を継続する。また、継続して進路指導室の充実を図る。 イ 災害等に備える知識と対応する力を生徒が身に付けるための防災教育に取り組む。</p>	<p>・学校教育自己診断</p> <p>(1) -ア 生徒の「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生が多い」70%以上 [58.9%]、保護者の「学校は親身になって相談に応じてくれる」70%以上 [67.8%] (1) -イ 部活動加入率の10%増加 [19.5%] 生徒の「学校は部活動が活発になるよう取り組んでいる」60%以上 [43.4%] (1) -ウ 生徒の「自分は掃除に積極的に取り組んでいる」80%以上 [58.3%] また、校外学習や修学旅行等での工夫</p> <p>(2) -ア ボランティア活動等に150人以上の生徒が参加 [600名] (2) -イ 生徒の「普段から遅刻しないよう心掛ける」90%以上 [79.5%] 遅刻者数の10%減少 [6,646名] (2) -ウ 行事運営に100人以上の生徒が関与するとともに生徒の「学校へ行くのが楽しい」70%以上 [58.9%] (2) -エ 各種事業の継続実施 [12事業]</p> <p>(3) -ア 施設の老朽化に伴う未改修箇所を減少させるとともに迅速な対応を行う。また、計画的な整備を行う (3) -イ 防災について学習する機会を年2回実施する</p>		
	2 地域やグローバルな社会を『たくましく生き抜く力』の基となる「確かな体力と学力」の定着	<p>(1) 「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」生徒のやる気を引き出す。</p> <p>(2) 生徒に「知能・技能」「思考力・判断力・表現力」の育成。</p>	<p>(1) ア 「学校経営推進費」事業等を活用し ICT 環境整備に努めるとともに「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」を味わえる、本校に適した授業方法を研究する。 イ 各授業や講習、補習の充実を図りながら、基礎基本の定着に努める。</p> <p>(2) ア 総合的な学習の時間が進路指導に結びつくよう基礎学力、教養を身に付けさせる。 イ 担任、学年団及び PTA 等の協力を仰ぎながら英検等の資格試験を推奨する。 ウ 授業規律を大切に「考える」「まとめる」「発表する」参加体験型のアクティブラーニングを踏まえて教え方を研究する。</p>	<p>・学校教育自己診断</p> <p>(1) ア 「学校経営推進費」事業等を活用し ICT 環境整備(全ホームルーム教室)に努めるとともに「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」を味わえる、本校に適した授業方法を研究する。 (1) イ 放課後、夏・冬の休業中に計画的で効果的な講習、補修の実施に努める。</p> <p>(2) -ア 生徒の「総合学習は進路に結びついている」70%以上 [55.2%] (2) -イ 英検の受検者数を30名増加 [17名] (2) -ウ 生の「教え方にさまざまな工夫をしている先生が多い」75%以上 [67.1%]</p>	
		3 将来の生き方をデザインし、自ら学び続けることができる生徒の育成	<p>(1) キャリア教育プランの実行。</p> <p>(2) アセスメントの活用。</p> <p>(3) 入学前から生き方プランを考える機会を提供する。</p>	<p>(1) ア 1年次より系統立てて、生徒個々が将来の生き方を考える機会を与える。 イ 大学等オープンキャンパス、インターンシップ、職場体験、看護体験等への参加を促す。 ウ 「学力向上のためのプロジェクトチーム」を再編成する。また、進路意識の高い生徒の学習の場を保障するため進学者向け講習会や合宿等を検討する。 エ 「進路だより」等を継続して、生徒や保護者への情報の提供を行う。 オ 粘り強い指導を続け進路未決定者を減少させる。</p> <p>(2) ア アセスメントの結果を個人面談や進路ホームルーム等で用いることにより、生徒は自分の基礎教養の定着度や「個々の弱み強み」を知る。</p> <p>(3) ア 将来の生き方をデザインし、本校で頑張りたい、と思う生徒が入学できるように広報活動の諸条件を整備する。 イ 「スポーツフェスティバル in イズトリ」実行委員会と本校に合致した内容を検討し充実を図る。</p>	<p>(1) -ア 生徒の「将来の進路や生き方について考える機会がある」75%以上 [63.8%] (1) -イ 大学等オープンキャンパスで100名を超え、インターンシップ等への参加者の10%増加 (R2年実績なし) (1) -ウ 進学希望者への対応。また、大学、短大進学者数の10%増加 [54名] (1) -エ 生徒の「先生は進路についての情報をよく知らせてくれる」85%以上 [62.6%] 保護者の「学校は進路についての情報をよく知らせてくれる」70%以上 [59.9%] (1) -オ 進路未決定者率の5%減少 [4名]</p> <p>(2) -ア 個人面談は年3回、進路ホームルームでは年1回、結果を活用する。</p> <p>(3) -ア オープンスクール参加中学生の5%増加 [160名]及びイズトリだよりを発行する。 (3) -イ スポーツフェスティバルの参加中学生数の3%増加 [未実施]</p>

4 自ら学び続ける教師集団の確立	<p>(1) 授業改善のための学び合い。</p> <p>(2) 教員や保護者が本校生徒、学校の実情を知る。</p>	<p>(1) ア 年3回以上の研修会を開催する。 イ 近隣の学校、教員等とも連携をとり、得た情報や知識を報告する機会を設けその成果を共有する。 ウ 授業見学の機会を増やすことにより、自己の授業改善に活かす。 エ 全国等で開催される講演・研修会や先進的な取り組みをする学校・PTA・部活動等に出向き研修する。</p> <p>(2) ア 経験の少ない教員と経験豊かな教員との情報交換をする場を定期的に設ける。 イ 「学力向上のためのプロジェクトチーム」の提言を取り入れていく。 ウ 教員は、生徒等の実情を理解する。言葉遣いや丁寧な対応で、人権を尊重しながら適切に対処する。</p>	<p>(1) -ア 研修会を開催し資質向上に努める。教員の「研究授業を定期的実施している」20%以上 [7.0%] (1) -イ 学期ごとに1名以上が報告 (1) -ウ 生徒の「他の先生が授業を見学に来ることがある」70%以上 [52.6%] (1) -エ 管外研修等を5人以上が実施する。</p> <p>(2) -ア 教員の「経験の少ない教員と経験豊かな教員の交流を定期的実施」70%以上 [59.0%] (2) -イ 教員の「学校教育計画・学校経営計画の重点目標に照らして目標を設定し教育活動を行う」85%以上 [79.6%] (2) -ウ 保護者の「先生は一社会人として適切な対応ができています」75%以上 [69.4%]</p>	
------------------	---	--	--	--